

上郡町の偉人

# 大鳥圭介

第三十回「鵬程万里」 中川由香

圭介は技術の導入や開発だけではなく、実際に事業を行い普及させて国を富ませる、実業にこだわりました。明治三十五年の「教育公報」に、男爵となった圭介が実業について述べた講演が記載されています。

日本人は議論は達者であるが、それだけでは国は豊かにならない、実際に実業を成功させて国益に寄与する者が乏しいと、圭介は憂慮しています。商業農業工業などの実業の中でも、特に工業を發展させ、生産量を上げ、海外へ製品を輸出し、国益に寄与する必要性を圭介は強調します。

工業開発においては試験が重要です。しかし工業試験には資金が必要で、個人や会社の力のみでは至難です。特に製鉄や重工業の開発は規模が大きく、政府が国家の責任として行う必要があると述べます。加えて、ガラスや製紙など、大衆工業製品の品質向上の重要性を圭介は説きます。強度、厚さ、色など品質が統一していない為に、外国との競争

に後れを取っている現状を指摘します。そしてこれら工業では、政府の試験所で世の中に手本を与えるべしとします。

圭介は明治十年頃、工部省工作局長として、品川硝子工場や造船所など、多数の官営工場を監督していました。品川硝子製作所は、採算が取れず、当時の政府方針で民間に払い下げられました。その二十五年後、圭介はたまたま大阪の天満でガラス工場を訪問します。その工場長が「あなたは大鳥さんではありませんか」と圭介に声をかけました。それは工部省品川硝子工場で職工の重鎮だった島田でした。天満の工場は八百名も職工がおり、島田はガラスの生産の様子を圭介に披露しました。特に建築用の窓ガラスは製造が難しく、ほとんどが英国やベルギーから高価な板ガラスを輸入でしたが、島田の工場が開発中ながら生産を開始していました。他にも、東京の本所で岩城という品川硝子の出身者がビール瓶や食器を製造し

ていました。すでに大抵のガラスは国内で生産され、実用に用いられていました。日本の硝子の生産高は明治末で四十万円(約二十五億円)に上り、中国、朝鮮、インド等へ輸出されてきました。品川硝子で試験した技術が元になったものといえます。

また、圭介は明治八年頃から、石油の採掘試験を行っていました。当時、日本の輸入品で砂糖と共に石油が大きな量を占めていました。国内に石油が存在するなら採掘して輸入を防ぎたいと考えました。しかし石油掘削には、地質を測量し、岩の傾きや形状を調査し、機械で錐を制御し、何百メートルも岩盤を貫いて掘る必要があります。それには大きな資金が必要です。圭介は当時の内務卿(内務大臣)大久保利通に掛け合い承諾を得て、大蔵卿の大隈重信に資金拠出を依頼しました。採掘試験の後、残念ながら工部省が廃止となり、石油生産高が上がらなかつた為に石油開発事業は中止となります。しかしその後、明治二十六年頃、圭介が朝鮮から帰国後に大隈重信と面会した時「君のやつた石油事業が、今はなかなか盛んになって海岸からも山からもたくさん出る、全くお前の考えた賜

物だ」と大隈は伝えました。最初に十分な成果が上がるまで試験は行えませんが、当時の測量結果や機械、技術は無駄にならず国を富ませました。また圭介の下で石油採掘を試験した職員は、後に日本の石油会社の黎明期を支えました。その後、日本の石油賦存量では増大する消費量を賄えず石油は輸入に頼ることになりましたが、国内石油生産は日本の石油消費の黎明期を支えました。

また、実業の発展の鍵となるのは人材育成です。この講演当時、専門学校が百七十五、工業学校が十三ありましたが、圭介は高等教育への支援が重要とします。圭介は、中堅技術者の養成機関である工手学校の設立を支援しました。(工手学校については次回に詳細を紹介し

す) これら実業にこだわった圭介の活動が、現在の技術立国の礎になったことに疑いはありません。圭介は常に実現し継続し国を豊かにする姿勢を貫きました。その功績は広く知られてはいますが、知る人は圭介へ感謝の言葉を残しています。